

新春座談会

塩竈市100年に向けての ひとつづくりとまちづくり



座談会の会場となった塩竈市魚市場にある「おさかなミュージアム セリミル」。親子で楽しみながら学ぶことができる。

未来に向けて、塩竈特有の豊かな地域資源を活かし、その恵みを体感できる魅力的な「塩竈」をつくり育てていくために、次世代の主役となる子どもたちがいきいきと成長できるまちづくりを考えます。



佐藤 英さん (司会)
子育て世代包括支援センター
「にこサポ」子育てコンシェルジュ



津田 勇健さん
(一社)のらてく 代表理事
市内で小規模保育園「わだつみ保育園」を運営



佐々木 秀之さん
宮城大学事業構想学群准教授 博士 (経済学)
塩竈市第6次塩竈市長長期総合計画審議会委員、
宮城県塩釜高等学校で「塩竈まちづくり活性化プロジェクト」実行委員会委員



阿部かほる
塩竈市議会議長



佐藤 光樹
塩竈市長



鈴木 恵美さん
市内で理容店
「FROM THE BARBER」
を経営



花淵 桂子さん
市内でコーヒーショップ
「Naturalbornstyle.」
を経営

地域の資源を生かした 魅力ある子育て

市長 ■ 明けましておめでとうござい
ます。昨年、塩竈市は市制施行80周
年を迎えました。どのように市政運
営を行うかで、今後90周年、100
周年への方向性が決まる重要な時期
を迎えたと思います。より良い塩竈
となるよう、次の段階へと一歩一
歩、進めていきたいと思っていま
す。

同時に、市民の皆さんに地元への
愛着を持っていただくことが重要と
なりますので、忌憚ないご意見をい
ただきたいと思えます。

津田 ■ 市内で小規模保育園を運営し
ています。うちの保育園は、外遊び
を大切にしています。

以前、子どもたちが遊べるフィー
ルドを探していると、こんなに近く
に浦戸諸島があることを知りまし
た。浦戸に向かったとき、同じ船に
乗っている方から声をかけられて、
「野々島はすごく景色が良い」と勧め
られ、島に遊びに行くようになりま
した。

野々島ではラベンダーを植えてい
る方との出会いをきっかけに、島の
良い場所を教えてもらいました。
「こんなに自然が豊かなら絶対に子
どもたちが喜ぶはず」と、植栽の活
動を一緒にするようになりました。

あるとき、「宇内浜」という美しい
浜に面した土地を所有者から「保育
のために使って良いよ」と言われま
したので、その土地を管理させてい
ただきながら、暖かいシーズンに
は、毎週子どもたちを連れていき、
ライフジャケットやウェットスーツ
を着て海で遊んだり、子どもたちと
一緒に調理をしてご飯を食べたり、
お昼寝は地元の集会所をお借りしな
がら活動させてもらっています。



美しい景観が広がる宇内浜(浦戸野々島)

浦戸諸島は、自然豊かで、いろい
ろな発見や体験ができ、遊びなが
ら、地元の魅力や資源を体験できる
場所です。島の人たちは「子どもの
声が聞こえて最高だ」と言ってくれ
ますし、お互いに共感しながら、子
どもたち自身が感じることを育てて
いくことができます。

また、伊保石公園は、すごく良い
森で、四季を感じる場所だと思いま
す。



市内で最も高い標高約 100 メートルの高台にあり、広大な森林がある伊保石公園

その活用方法として、火が使える場所があると良いと思います。焚火をしたり、バーベキューをしたり、市場で買ってきた魚を焼いても良いだろうし、今はデイキャンプもはやっていきますし、そのような体験ができるようになったら良いと思います。



保育園、施設を愛される津田さん、地域に根付き愛される津田さん、地域社会に貢献できる津田さんを目指している

阿部 ■ 幼児教育というのは大切です。遊びや食事の中で火の使い方を学ぶという思い切った保育ができることなど、実にすばらしい環境で頑張っていると思います。子どもが自然と触れ合うということは、何者にも代えがたい学習だと思っています。

既存概念にとらわれない 発想で変えていく

市長 ■ 伊保石公園の整備についてアンケートをとりましたが「昔は行ったことがあるけど、今は行ってない」と「遊具なども壊れたまま」「木々がうっそうと茂っていて危ない」という意見がありました。公園は10万坪の面積があり、当初整備したとき

からほとんど手を付けていません。なんと10年かけて、市民の皆さんが使いたいと思う公園に作り変えることが大きな目標です。今までだと、「公園とはこうあるべき」という既存概念で整備されているものがあります。例えばすべり台とかブランコです。これらはどの公園にも同じ遊具があるという状況です。で、既存概念はやめ、その場所に必要なのは何かを考えなければなりません。



子育てで活躍する佐藤さん、自身の経験を活かして子育ての支援をする佐藤さん

佐藤 ■ 私も以前子育てで、交流を求め、いろいろなところに行ったりしたのですが、塩竈は子どもをつれて気軽に遊ばせるところが少ないなと思っていて、遊びに行くとしたら、利府や多賀城の方に出かけたりします。他のお母さんからもそのような声を聞くこともあります。

小中学校で配られた「広報シオガマ2041」に掲載されている、子どもたちが描いた未来の伊保石公園を見ると、グランピングなどをイメージしていて、このような公園になってほしいということが描いて

あります。焚火やデイキャンプができ、交流できる場所が、身近にあって良いなと思いました。



「広報シオガマ 2041」

市内小中学生が20年後の未来の塩竈をイラストなどで想像し編集されました



鈴木 ■ 塩竈は坂が多く、ベビーカーでは動きにくいところが残念で、伊保石公園も気軽には行けないかなと思いましたが、遊ぶところが無いわけではないですが、例えば、この「おさかなミュージアム」も子どもたちが来たらずごく喜ぶところだと思いますが、意外とその存在を知らない市民も多くいるのではないかと思います。



子育て世代が利用しやすいお店づくりを実践しながら、自身も子育て奮闘中の鈴木さん

山形から来た甥っ子が、この「おさかなミュージアム」に来たのですが、とても楽しそう、もう一回連れてきてほしいと言ってくらいました。このような既存の施設をもっとアピールすべきだと思いますし、伊保石公

園で、フードトラックなどが来るようなイベントがあれば、車に乗せて遊びに行きたいと思います。

花洲 ■「おさかなミュージアム」も駐車場があり行きやすい施設ですが、子どもだけではなく、もつと子育て世代の大人にも、その場所に魅力を感じさせるものがあることが必要だと思います。

私も以前は、伊保石公園に子どもを連れて遊びに行っていました。遊具で遊ぶというよりは、アリの観察や、虫を探りに行くという感じでした。男の子二人でしたが、広い公園なので、走り回っている様子も見えらるし、駐車場もあるので、疲れたら車で寝かしつけたりして利用していました。

魚が好きだから「おさかなミュージアム」が魅力的に感じたり、虫が好きだから伊保石公園に魅力を感じたりするなど、魅力を感じる場所は人それぞれ違うと思います。ただ、小さい子どもは歩いて行くことができないので、子どもを連れていく大人が魅力を感じないと行かなくなってしまうと思います。

大きくなれば、学校が終わってから、釣り竿を持ってマリゲートに釣りに行ったりしていたので、子どもにとっては遊ぶところはあると思うんですけど、公園も同じくらいの魅力があるはずで、そこにいるときに大人

がつまらないという思いをしなければ良いと思います。大人も子どもも含めたフォロワーが必要だと思います。

阿部 ■私も子どもたちを外に連れていきますが、何にもいらないんですよ。アリのおいかけたり、ドングリを拾っていたり、何もなくても遊べる。そういった子どもの発想を引き出すには、自然が必要だと思います。

加瀬沼公園に行ってみたのですが、みんなテントを張っていました。公園の使い方がこんなに変わってきたんだと感じました。



長年、エスプで読み聞かせなど、子どもの教育活動に携わっている阿部議長

市長がおっしゃるように、伊保石公園を変えていきたいと考えられていることは、広い何にもない敷地が、多くの可能性を秘めているということだと思えます。公園だからこういう利用をしなくてはいけないということはないのかなと思います。

民間の力を取り入れた持続可能な仕組みを

花洲 ■公園を継続的に活用し続けることを考えると、そこで、何か利益を生み出さなければ、市がずっと管理費などを負担し続けることになってしまうと思います。税金などの市の収入でできることも限りがあるので、市が負担し続ける10万坪ではなくて、そこに民間の力が入り、公園を維持するのは厳しいと思います。

勾当台公園や、グランデイ21などのように、フードトラックが来て、公園の場所貸しをして使用料をもらえば、少しでも市の収入になるし、賑わいも生まれると思います。親子連れだけではなく、やはり大人が楽しめないと、住みたいまちに変わらないと思います。塩竈に住みたいと思えば、そこが子育てしやすい場所であれば、循環が生まれてくるのではないかと思います。そう考えると公園で利益を生むことは必要だと思います。



釜淵神社の祭事でお振舞の復活など地域活動を行っている花洲さん

佐々木 ■伊保石公園のような10万坪という広さの場所を整備し、変えていくということは、そう簡単ではありません。しかし、これから10年、20年先を踏まえて、公園の利活用を考えることは、市民にとつてもやりのある課題ですし、塩竈市が総力をあげて取り組むべきことに値すると思います。



社会貢献に資する自治体など、宮城大学の准教授の佐々木先生は、地域資源論を担い、地域発展に貢献

取り組む際は、そもそも公園って何なのかという、既成概念を変えないと、今の話は実現できないと思います。たとえば、公園イコール遊具という感覚は、行政側や大人が、既に子どもにおもちゃを与えてしまっていることになるので、子どもたちの主体性を育むということにはつながりません。

あの場所を公園だと考えないで、ここをどういうエリアにするかという、思い切った議論をしないと、ありきたりのものになってしまうし、その維持管理にもお金がかかってしまうことになる。本当に良いのであれば人は来ます。少々場所が悪くても人は来ます。そういうものをどう

やって創り出すかという議論が不可欠ということですが。

古き良き塩竈に新しいものを取り入れて、今出たような話を具体的にすることが大事だと思っています。



国も制度を緩和していて、例えば、PFIという方法があります。施設を建てるときに、民間の資金やアイデアを取り入れる手法ですが、その公園版が「パークPFI」です。

市民の投資や寄付を取り入れることも議論する必要があります。「シビックプライド」という考え方は、市民がまちに愛着を持つということに加えて、主体的にまちづくりに参加

加することを意味しています。

クラウドファンディングを取り入れても良いと思います。運営母体が自治体となる「ガバメント・クラウドファンディング」と呼ばれる方法もあります。塩竈でもチャレンジするのはどうでしょうか。伊保石公園をこのように変えたいと全国に発信し、市民に加えて、各地の塩竈ファンも巻き込んで、取り組みを進めるのも一手だと思います。

そのプロセスをオープンにし、市民参加で進めることの必要性もお話しておきたいと思っています。

コミュニティ・デザインと言いますが、施設などのハード面に加えて、機能や使い方といったソフト面を、最初から、ワークショップを通して、みんなで一緒に考えていくことが重要です。



市長佐藤が「未来へのストーリーの流れるまちづくり」を行政で実現したいと語る。

市長 ■ 市制施行80周年の節目から、100周年を目標として、どう作っていくか、それは伊保石公園にも通じますし、市民の皆さんの意識にも通じることです。10年先、20年先の塩竈をどう育てていくか、継続して

いくものは継続するか、それをまとめる時が来ていると思っています。行政は表に出ないで、市民の方のやりたいことや思いを陰で見守り、支えていけるようにしていきたいです。

佐々木 ■ 東日本大震災の発生直後に出されたメッセージがまさにそれです。行政が見守るといえるのは、言葉を変えると制度設計で市民の活動を支えるということです。あとは市民参加でやっていく段階になりますが、改めて人材が求められます。やっぱり、まちづくりは人づくりということになりますよね。ただ、人をつくるというと、漠然としているので、人がまちづくりに必要なスキルを学ぶための仕組みづくりが大切ですね。

本日ご参加の皆さんが取り組んでいることも、やることで経験値が上がっていると思います。それを自分の中で仕組みにしていき、さらに人を巻き込んでいく。その概念図を「リレーションマップ」と呼びます。しっかり仕組みを作り、主観的なものを可視化しながら、進めていくということが市民事業には必要です。その作業から、つながりが生まれ、子どもを含めた、多くの人の役割が発生していきます。

市長 ■ 10年後、20年後を想像しながら、一つ一つ、ストーリーにつながっていくようにしていくことが行政の

役割だと改めて思いました。今、皆さんからいただいたお話しは、今後、一歩でも半歩でも、次のステップへと進めていただきたいと思います。行政としても、環境がより良くなるよう、話し合いながら整備に向けて努力しています。

そして、そこに子どもが集まり、子どもがいると、それだけでも高齢者の皆さんは元気になるので、そのようなつながりをストーリーとしてしっかり目標にしながら、皆さんのお手伝いをしていきたいと思っていますので、どんどん市に言っていただきたいと思っています。話し合いながら、お互いの信頼関係を作っていくれば、楽しいまちになると思います。本日はありがとうございました。



「子どもも大人も楽しめるまちづくり」がキーワードとなった今回の座談会。最後は楽しく記念撮影

☎ 0222 (355) 5728
秘書広報課市政情報係